

十全會雜誌

(第四拾五號) 合刊

原著及實驗

○巨大ナル子宮粘液纖維性筋腫ノ實驗

特別會員 小川勝陳 閱金
特別會員 八田智証 述 (澤)

昨年十一月二十五日舊内科教室ニ於ケル第三十五回十全會通常講話會ニ於テ親シク患者ヲ供覽シ越エテ本年四月十七日本校濟々堂ニ於ケル第七回北陸聯合醫學會ニ於テ之ヨリ摘出セル腫瘍ニ就テ自ラ説明ノ勞ヲ取リシヨリ白駒ノ隙過キ易ク既ニ一年内外ヲ闊シヌ其間本誌ノ餘白ヲ汚サントセシモ故アリテ意ノ如ク果サバリシガ這次思フ所アリ禿筆ヲ弄シテ其梗概ヲ述ベ聊カ報告スル所アラントス載籍ヲ涉獵シ類例ヲ攷較シ之ヲ學理ニ討子之ヲ實驗ニ徵スル如キハ驚才素其任ニアラズ只事ノ湮滅ヲ恐レ斯學上一例ヲ追加セント欲シ茲ニ贅頭ヲ斷テ跋尾ヲ殺ギ其實事ヲ列ヌルニ止ム讀者乞フ題目ナ一瞥シテ記憶ニ資セラレバ我願則チ足ル (述者識)

* * * * *

子宮ニ發生スル良性腫瘍ト云ヘハ筋腫ヲ連想シ筋腫ト云ヘハ直ニ子宮ヲ連想スルハ吾人婦人科醫ノ通弊ナリ、筋腫ノ子宮ニ發生スルコトノ多數ナル寔ニ斯ノ如キモノアリト雖只其大ナル大人頭大以上ヲ超ユルモノニ至テハ稍罕ナリト謂フヲ得ベク妊娠後半期大殊ニ其末期大以上ノモノニ至テハ甚タ罕ナリト謂ハザル可ラス、而ノ筋腫ノ増殖ヤ

時トシテ頗ル巨大ニ達スルヲアリ、曾テ聞ク Binz 氏ハ六十二磅、Walter 氏ハ七十一磅、Eckardt 氏ハ百五十六磅、Stockard 氏ハ黑奴ニ就テ百三十五磅ノ子宮筋腫ヲ實驗シ、Hunter 氏ハ子宮纖維樣腫ヲ有スル百四十磅ノ屍體ニ於テ其體重九十五磅ナリシ者ヲ解剖シ、又 Severanū 氏ハ臍圍百八十五仙迷重量七十八基瓦ノ子宮囊腫性纖維腫ヲ實驗セリト、吾人ノ寡聞ニシテ文獻ニ徵スルノ餘澤ニ乏シキ未ダ本邦ニ於テ巨大ナル眞性子宮筋腫ノ實驗報告ニ接スルノ機渺シト雖、明治二十六年六月山田謙治氏ハ當科ニ於テ腹圍九十五仙迷、内容一万三千瓦、腫瘍千六百瓦ニ及フ宮体前面ヨリ拇指大莖蒂ヲ以テ發生セル巨大ナル子宮纖維囊腫ヲ治驗報告セラレタル外、河野徹志氏ハ妊娠ヲ伴ヒタル三千三百七十五瓦ノ子宮腹膜下纖維腫、楠田謙藏氏ハ妊娠八ヶ月大重量七基瓦ノ間質性子宮纖維筋腫、熊谷省三氏ハ長徑三十六、五仙迷、短徑二十一仙迷、重量八基六十二瓦ニ及ヒ殆ント全腹腔ヲ占領セシ子宮腹膜下筋腫、神戸病院婦人科ニテハ體部ヨリ發生セル七、八基瓦ノ子宮筋腫、池田陽一氏ハ三千二百八十瓦ノ子宮体部纖維筋腫ヲ治驗セラレ、又緒方正清氏ハ五千五百瓦ノ多發性子宮纖維筋腫、櫻井三之助氏ハ最大腹圍百四十仙迷、重量三十七斤七合強ニ達スル子宮腹膜下淋巴管擴張性筋腫、高山尙平氏ハ一部癌腫變性ヲ起セシ四千百瓦ノ子宮筋腫、京都大學婦人科教室ニテハ示指大莖蒂ヲ以テ基底部ヨリ發生セシ二貫二百五十瓦ノ子宮血管腫性筋腫ヲ各實驗セラレタリ、其他佐藤勤也氏ニ據レハ四貫六百瓦ノ子宮筋腫ヲ摘出セラレタルコトアリト云フ、是ヲ以テ觀レバ今茲ニ報告セントスル吾人ノ遭遇シタル一例ノ如キハ其巨大ナル蓋シマタ稀中ノ稀ニ屬スルモノナラン乎

加賀國石〇郡吉〇谷村字〇宮カ十一番地

患 婦

平 民 農業家族 西

〇 く 〇

明治十年七月六日生

血族ノ關係

祖父十年前祖母三年前各七十七八歳ノ長壽ヲ以テ老衰ノ爲ニ逝キ、父五十八歳母五十五歳共ニ健存ス、同胞凡テ五人患婦ハ其長ニシテ四弟アリ、第一弟ハ第四弟ト家郷ニ在リテ父ノ業ヲ輔クルモ、第二弟ハ一昨年九月旅順ニテ戰死シ第三弟亦同月同所ニ於テ胸部貫通銃創ヲ受ケ后送歸還既ニ一年以上ヲ過キタル昨臘尙金澤豫備病院ニ在リ、而シテ遺傳的疾疾ニ就テハ証スヘキ素因ナク、酒煙草ノ如キ勿論之ヲ取ラズ其他特ニ嗜好品ト稱スヘキモノナシ

既往症

幼時ヨリ特ニ強壯ト云フニアラザルモ普通ノ健康ヲ保チ、十歳麻疹ヲ經過シ種痘數回ニ及ヒシモ初回ノミ稍善感セリ、十七八歳ノ頃二回輕キ「マラリヤ」ニ罹リタル外、十九歳眼疾ヲ患ヒ右眼終ニ其視力ヲ失ヒ微ニ明暗ヲ辨スルニ過キザルニ至レリ

本病歴トシテハ去三十四年一月頃ヨリ漸次腹部膨滿ヲ來シ時々頭痛スルノ外立業ニ際シ放尿困難ヲ來セリ、其後放尿困難ハ自然ニ消退セシモ腹滿ハ年ヲ逐フテ増大シ之ト共ニ餘リ移動シ難キ硬キ腫瘤ヲ容易ニ觸知セリ、初メテ本院ノ診ヲ受クルヤ幾許モナク入院ノ許可ヲ得十二月ヨリ翌三十五年六月マデ在院、其間注射(エルゴチン液)ヲ施サレ多少縮小セシ如クナリシモ、退院後全ク受療セザリシ故カ其後再ビ膨大ノ傾ヲ生シ、殊ニ昨年春期ヨリハ増大ノ傾向著シク全腹ノ緊滿頗ル高度ニ達シ直立歩行困難ヲ覺エ時々下肢ノ浮腫ヲ來スアリ、然レ僅ニ倦怠不快並ニ體動ニ際シ不自由ヲ感スル外之カ爲ニ併發症ナク又精神的障害ナク、食欲常ニ佳良ニシテ夜間能ク安眠シ、尿利順當ニシテ便通一日一行整然タリ、即チ通常此等多クノ者ニ伴フ出血、疼痛等ノ如キ全ク之ヲ認ムルヲ得ズ

月經ハ十八歳冬初テ開キ爾來毎月整順ニシテ持長二日其量少シ、三十四年ノ夏三ヶ月斗不潮ノコトアリ、時恰モ春

來腹滿ヲ覺エタル際ナリシヲ以テ山道七里ヲ辿リ鶴來町ニ出テ初テ醫診ヲ乞ヒ、同年十月本院ニ來リ漸ク婦人科的診察ヲ受ク、蓋シ中宮ノ地タル山河重疊、僻陬遠ク白山ノ麓ニ位シ醫診ヲ受クル頗ル至難、幾多病的障害ノ如キ醫藥ノ恩惠ニ浴シ難ク空シク放任セラレテ何等ノ所置ヲモ爲サルヲ多キヲ常トス

現 症

骨骼中等以上ニシテ榮養稍不良、顔貌ハ少シク無力性ヲ帶ビ活氣ニ乏シキノ觀アルモ苦悶懊惱ノ狀ナシ、皮膚ハ一般ニ暗褐色ニシテ蒼白又ハ黃胆色ヲ呈セス、胸部以上ニ於テ皮下脂肪層少ナク肋骨、鎖骨、顴骨等ノ如キ骨立ノ狀ナキニアラサルモ腰部以下ハ却テ脂肪ニ富ミ、右眼ハ島嶼狀角膜斑翳ヲ帶フルモ瞼、球結膜異常ナク、口裂ハ常ニ之ヲ開クノ僻アルモ思フニ安靜ナル呼吸ヲ營マンカ爲メ自然的開口ヲ爲スモノナランカ、口腔、舌、咽喉異常ヲ認メズ

胸廓ハ狹小ニシテ下方ニ至ルニ從ヒ左右兩側前方共ニ開大外翻シテ膨大ナル腹部ニ移行シ縱徑比較的短縮ノ狀アリ、乳房ハ發育不良ニシテ全ク膨隆ヲ呈スルコトナク又着色スル所極テ稀ナルモ右乳頭ハ左側ニ比シテ一、五_{cm}下方ニ存シ劒狀突起ハ殆ント直角ニ近ク前方ニ彎曲ス、而シテ左右兩肺ハ共ニ少シク上方ニ壓縮セラル、モ左肺上葉前面ニ於テ僅ニ呼吸音微弱ナル外打診上並ニ聽診上異常ヲ認メズ、心臟ノ位置ハ上界第三肋骨、下界第六肋骨、右界胸骨左緣、左界左乳線ニ在リテ打診上増大及轉位スルコトナキカ如ク、心音微弱ナルモ雜音ヲ聽取セズ

殆ント球狀ニ膨滿セル巨大ナル肚腹ハ、其左上方ニ於テ殊ニ少シク膨隆ヲ呈シ、其面平等滑澤ニシテ皮膚ノ緊張甚シキ爲一種ノ光澤ヲ發シ、開大怒張セル皮下靜脈ハ蜿蜒トシテ顯ハレ、全ク壓平セラレタル臍窩ハ聊カ着色ヲ異ニスルニ依リ漸ク之ヲ認ムルニ過キズシテ正中線ヨリモ左方ニ偏セリ、今之ヲ按壓スルニ全面平滑ニシテ皮下直ニ全

腹腔ヲ充填スル硬固ナル實質性肉様ノ腫瘤ヲ觸ル、モ殆ント固定狀態ニ在リテ少シモ周圍ニ移動セズ、壓スルニ疼痛ナク亦波動ヲ觸レズ、試ニ後方ヨリ體ヲ支ヘテ立タシムルニ其腫瘤ノ大ナル上ハ劒尖ヲ壓シ左右季肋部ヲ開翻シテ深ク横膈膜下ニ入り、下ハ懸垂シテ覆フコト大腿ノ中央ニ及ヒ側方ハ膨溢、腸骨前上棘ヲ全ク觸レ得サルニ至ラシム、此ノ如クナルヲ以テ肝臟、脾臟等ノ如キ后上方ニ壓排セラレタルカ如ク之ヲ觸知スルニ由ナク、且ツ打診上一般ニ同様ナル實質性濁音ヲ呈スルモ壓排セラレタル腸管ハ左右后上方ニ鼓音ヲ帶フルニ止マリ体位ニ依リテ打診的變換ヲ來サズ

斯ノ如キ巨大ナル腹部腫瘤ノ爲患婦ハ凭掛リ又ハ支柱ナクシテ自ラ直立ニ堪エ能ハサルハ勿論ニシテ、常ニ后方ニ疊積セル布團ニ凭リカ、リ半座半臥ノ位置ヲ取ルヲ以テ最適當ナル起居法トセリ、而シテ此位置ニ於テ少シク上體ヲ前方ニ屈メ所謂「あひづき」ヲ爲ス際兩臂ハ或物體ノ上ニ支フルカ如キモ而モ其支フルモノハ他ノ物體ニアラズシテ實ハ彼カ膨滿セル腹部ナリ、即チ彼ハ自己ノ臂ヲ支フルニ腹ヲ以テ「あひづき」ヲ爲スナリ、若シ夫レ睡眠ニ就カントスルヤ只其狀態ニ於テ伽趺セル下肢ヲ伸展シテ前方ニ投ケ出スニ止マリ、且ツ歩行ニ當リ一種特有ノ觀ヲ現ハスト雖歩行ニハ敢テ支杖又ハ介者ヲ要スルコトナシ、即チ前方ニ膨出セル腹部ニ對シテ上體殊ニ肩胛ヲ可及の後方ニ反張シ以テ重點ヲ保持シ、渾身ノ力ヲ加ヘタル下肢ハ歩一步恰モ半圓形ヲ画クカ如キ狀態ヲナシ、振子のニ交々體ヲ左右ニ動カシツ、而モ身體ノ平均ヲ失ハサランガ爲ニ寧ロ比較的速ニ歩ヲ移ス所、宛然鵝鳥ノ歩行ニ彷彿タルモノアリ

上肢ハ稍羸瘦スルモ機質的異常ナク、下肢ハ上肢ニ比シテ脂肪ト筋肉ノ發育佳良ナルモ左右多少其大サヲ異ニシ右ハ左ヨリモ一般ニ太シ、且ツ僅少ナルモ其右ニ於テ殊ニ浮腫狀ヲ呈シ鬱血性ノ色澤ヲ顯ハス、今腹部ニ手ヲ貼シ臍

蹠部ヲ窺フニ兩大腿ノ前上内面ヨリ鼠蹠部ニ互リ靜脉瘤ノ怒張蛇行著シク瘤々蔓狀ヲナスヲ見ル、而シテ四肢ニ於ケル知覺及運動ハ障害ヲ認メズ

脊柱ハ前後ニ於テ其縱軸ノ灣曲多少其度ヲ異ニスルモノナキニアラザルモ側灣ヲ呈スルコトナシ

腹部ノ測定、前述ノ如ク患婦ハ先年外來診察ヲ受ケ加之學用患者トシテ入院治療セシコトアリ、今當時ノ外來記録ニ就キ腹部ノ測定ヲ記載スルニ左ノ如キモノアリ

年 月 日 臍 圍 最大 腹 圍 臍、劍尖間 臍、耻骨縫隙間

明治三十四年十月一日 八四、cm 八六、cm(臍上五cm) 一八、cm 二〇、cm

同三十五年十一月七日 九三、cm 九五、cm(臍上四cm) 二〇、cm 二七、五cm

而シテ昨年九月十日彼ハ三度外來診察ニ來リ即日入院セリ、翌十一日之ヲ測定スルニ

臍 圍 最大 腹 圍 劍 臍 臍 耻 高 サ

立 位 一二九、cm 一三二cm(臍上四、cm) 三九、cm 三八、五cm

仰臥位(半坐) 一三四、cm 臍圍ト全シ 三七、cm 三四、五cm 四二、cm(床上ヨリ)

坐 位 一三六、五cm 臍圍ト全シ 三六、五cm 達シ難クシテ測リ難シ

ノ如クニシテ爾後測定數次、十二月二十二日即チ手術前日施セル最後ノ測定ニ據レバ

臍 圍 最大 腹 圍 劍 臍 臍 耻 右前上棘 左前上棘

立 位 一三九、cm 一四〇、cm(臍上六cm) 四一、cm 三九、cm 四九、cm

仰臥位(半坐) 一四一、五cm 臍圍ト全シ 三九、cm 三六、cm 五三、cm 四一、cm

坐位

一四五、五_{cm} 臍圍ト全シ

四〇、_{cm}

測リ達シ

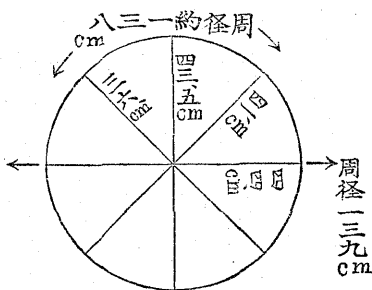
五三、五_{cm}

四一、_{cm}

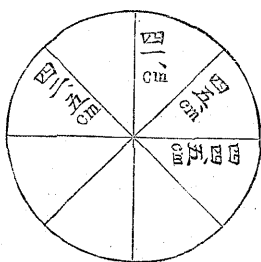
吾人ハ其測定ニ可及の精確ヲ期スルモ、尺帶ノ卷舒ト呼吸ノ如何ニヨリ毎回〇、五乃至時トシテ一_{cm}内外ノ差異ヲ來シ易キハ蓋シ實驗上免レ難キ所ナリ

更ニ腫瘤ノ直徑ヲ概定スヘク外方ヨリ臍ヲ交叉點トシテ測定セシニ即チ左圖ノ如シ、但シ臍ハ正中線ヨリ立位ニ於テ五、_{cm} 仰臥位ニ於テ二、_{cm} 左偏ス

立位



仰臥位



尙事蛇足ノ嫌ナキニアラサルモ最後ノ測定時ニ於テ試ニ各部ニ就テ測リ得タルモノヲ掲クレハ則チ次ノ如シ

(凡テ立位)

頭部

頭圍 約五〇、五_{cm}

縱徑 一六、五_{cm}

大橫徑 一四、_{cm}

小橫徑 一三、五_{cm}

大斜徑 二二、_{cm}

小橫徑 一七、_{cm}

顔面

顴骨突起間 一一、_{cm}

髮際額間 一七、_{cm}

第十卷雜誌第四十五號

頸圍 二七、五 cm

上膊骨頭間 三五、cm 周徑 八三、五 cm

胸部 胸骨上端間 一六、cm

右乳頭間 一四、五 cm

左乳頭間 一一、cm

右乳頭間 四四、五 cm

左乳頭間 八五、五 cm

劍尖部周徑 九三、cm

骨盤 前上棘間 二六、cm

腸骨櫛間 二七、cm

大轉子間 三〇、五 cm

前後徑 二〇、五 cm

上肢 右—上膊中央部周徑 一九、cm

左—上膊中央部周徑 一八、五 cm

前膊中央部周徑 一七、五 cm

兩中指間 一五二、cm

下肢 右—上腿中央部周徑 四四、五 cm

左—上腿中央部周徑 四二、cm

下腿中央部周徑 二九、五 cm

下腿最下圍 三三、五 cm

大下腿最下圍 三〇、五 cm

身長

體重

明治三十八年九月十一日

七四、四七五 基 實 百十 瓦 多

全 十月十七日

七七、一五〇 (二〇、五四〇)

全 十二月廿一日

一四六、cm 八〇、三七五 (二一、九三〇)

右ノ如ク身長一四六、cm ナリト雖彼ハ其巨大ナル腹部重量ノ爲メ直立不動ノ姿勢ヲ取ルコト能ハズ、即チ全然兩膝關節ヲ伸展シ得ザルナリ、故ニ若シ身長ト兩中指間ノ距離殆ント相等シキモノナリトセバ其兩中指間ノ距離ナル

一五二、cm ハ或ハ直立不動ノ際ノ身長ト看做シテ誤ナキニ庶幾ンカ、即チ彼ハ日本婦人トシテ平均以上ナル所謂五尺ノ女子ト稱シ得ベキナリ

内診所見、其巨大ナル腹部ト重量ノ爲メ婦人科診察臺ニ上ホスコト頗ル困難ニシテ且ツ危險ナルモノアリ、入院后辛フシテ之ヲ載セ内診ヲ試ムルコト僅ニ一回、外陰部發育普通ニシテ異常ナク處女膜完全シ膈壁粘滑ニシテ牽引ノ爲メ皺襞ニ乏シキモ粘膜一体ニ充血ノ狀アリ、子宮腔部ハ増大セル宮體(腫瘤)ノ爲ニ高ク舉上セラレ、深キ陷没ヲ顯ハシ指頭達セズ視診猶及フ所アラズ、輸卵管、卵巢亦之ヲ觸ル、ニ由ナシ

入院後ノ經過

前回入院時ニ於ケル病床記錄不幸ニシテ今之ヲ檢出シ難キモノアリト雖思フニ經過緩慢、他ノ不快ノ症狀ヲ發セザリシカ如シ、而シテ曩ニ九月十日再ヒ入院セシヨリ体温三十七度、脈搏八十五内外ヲ上下シ、食欲佳良、便通整正一日一乃至二行、尿利、尿量亦通常ニシテ一日千瓦時トシテ千五百瓦ニ至ルコトアリ、其間麥角劑ヲ連用スルニ止マリ殆ント他藥ヲ投セシコトナカリキ

十一月二十六日午後試驗的穿刺術ヲ行ヘリ、腹壁著シク緊張シテ腫瘤硬固ナルモ多少彈力性ヲ帶ビ抵抗弱ク恰モ假性波動ヲ顯ス如キ所アリシヲ以テ、或ハ軟化セシ部分ナルベキカト推ヒ腹水穿刺器ヲ以テ前腹ニ於テ之ヲ試ムルコト二回ニ及ヒシモ只僅少ノ血液ヲ得タルノミ、假令マタ軟化部分アリトスルモ腫瘤ノ大ナル若シ表在セザリセバ一小穿刺器ノ達シ得ル所ナラサリシヤ明ナリ

入院後ノ彼ハ臨床實習ノ學生ヲシテ痛ク其奇例ニ驚カシメ且ツ一汎ノ人ヲシテ其風貌ノ異彩ニ深キ同情ヲ寄セツ、而モ自覺的ニハ寧ロ息災病人ヲ以テ數月ヲ無事經過セリ、其間彼レ及其両親ヨリ死ヲ期シテ手術ヲ強ヒ之ヲ希

求スル幾回ナルヲ知ラス、殊ニ卵巢囊腫等ニテ手術的全治ノ幸ヲ得在院數週ニシテ欣喜退院スル者簾々アルヲ見テハ其願切實ヲ極ムルモノアリ、只這裡九死ニ一生ヲ得セシメントスル術者ノ心意亦慮ナカル可ラズ、乃チ將ニ冬期休業ニ入ラントスルニ當リ三十八年最終ノ剖腹術患者トシテ茲ニ手術摘出スルニ決ス

剖腹術概要

十二月二十二日午後一時五分患婦防腐手術室ニ入ル、室温二十五度、脈搏百〇四至、呼吸三十回、体温三十七度七分(腔内)ナリ、一時十二分格魯兒仿儻謨依的兒混合麻醉ヲ始メタルモ容易ニ麻醉ニ陥ラザルヲ以テ單ニ格魯兒仿儻謨ノミトナシ漸ク深麻醉ヲ催スニ及ヒ、式ノ如ク嚴重ナル腹壁消毒ヲ施シ一時五十七分小川教授執刀白條ニ沿フテ臍下腹壁ヲ截ルコト約二十cm、緊張甚シキ爲メ皮下諸組織頗ル菲薄、層々之ヲ區別スルコト難クシテ刀ノ運用常ノ如クナリシニ係ラス一舉直ニ腫瘤ニ達セリ、即チ腫瘤ハ腹膜ト著明ナル癒着ヲナスヲ以テ先ツ指腹ニテ之ヲ剝離シ且ツ切開口ヲ開大シツ、周圍トノ關係ヲ檢知セントスルモ、腫瘤面ノ大部癒着スルノミナラズ癒着甚ク強靱ニシテ剝離意ノ如ク容易ナラス、而モ此際腫瘤ト腸管、輸尿管、殊ニ膀胱トノ關係如何、若シ癒着アリトセバ其部位及程度如何ハ其最注意ヲ要スル所ナリシヲ以テ、先ツ尿道カテーテルニテ膀胱内ニ殺菌硼酸水ヲ注入スルニ、カテーテルノ方向左前上方ニ走り腫瘤ノ左前下方ニ接シテ膀胱ノ存在スルヲ知ルモ、腫瘤ノ爲メ尿道ノ方向頗ル屈曲スルヲ以テ金屬性カテーテルハ之ニ支ヘラレテ進ムコト難ク膀胱基底ノ高サヲ確定スルニ惱メリ

尙創口ヲ上下ニ開大シツ、鈍的ニ剝離ヲ進ムルニ腫瘤ノ右上方ニ於テ大網膜、左下方ニ於テ腸間膜ノ癒着スルモノアリ、腹壁ノ癒着ハ前面ヨリモ兩側ニ於テ殊ニ著シク、宮體ノ膨大ニツレ増育セル長大ナル圓靱帶廣般ナル扁靱帶亦之ニ預レリ、更ニ披開之ヲ視フニ子宮基底ハ劔尖ニ及ビ左右輸卵管、剪彩及卵巢ハ季肋部ニ達シ肋骨ニ接スルノ

奇觀アリ、此強靱ニシテ大ナル癒着部ハ豫メ殺菌「チラトンゴムカテーテル」ヲ以テ之ニ二重結紮ヲ施シ切離スルコト左右ニ於テ各二、今ヤ療着ノ大半ハ切除セラレタルヲ以テ切離ニ從ヒ創外ニ逸出セントスル平滑巨大ナル腫瘤ヲ、更ニ助手二名ヲ加ヘ術者ト共ニ徐ロニ擡舉スルニ、腫瘤ノ後面幸ニ癒着ナク唯右輸尿管ノ之ト癒着シテ右上后方ヨリ左下前方ニ走ルモノアリ即チ細心之ヲ剝離シ、更ニ進ンテ子宮腔部ノ關係ヲ檢シテ之カ所置ヲ爲サントセシニ、全ク周圍ノ癒着ヲ絶タレ其足場ヲ失ヒタル孤立の大腫瘤ハ自己ノ重量ニヤ制セラレケン、支持セル三名ノ助手ガ擡ゲツ、アル内、脆クモ腕キ取ラレタルカ如ク不意ニ其腔穹窿部ニ於テ離斷セラレタリ

離斷部ヲ檢スルニ斷面正ニシテ出血少ナキモ、今ヤ腹腔ハ腹壁切開口ノ外新ニ腔ヲ通ホシテ直ニ外界ニ開キタルヲ以テ、直ニ密ニ縫合ヲ施シ所謂腔天蓋ヲ閉チ腹腔ト全ク交通ヲ絶ツ、是ニ於テ膀胱ニ損傷ヲ與ヘザリシヤ否ヤヲ檢センカ爲ニ送入シ置キタルカテーテルヨリ礮水ヲ注入スルニ自ラ腹腔ニ漏ル、カ如シ、尿道屈曲、腫瘤ニ支ヘラレテ挿入スルヲ得サリシ金屬性カテーテルハ腫瘤除去ノ爲メ意ノ如ク深ク挿入シ得ラル、ニ至リシヲ以テ徐々ニ力ヲ加ヘテ之ヲ進ムルニ其尖端何等ノ抵抗ナク腹腔ニ顯ハル、ヲ見ル、果セル哉膀胱ハ其腫瘍ノ發育増大ニ隨ヒ左前上方ニ高ク牽引セラレ且ツ腹壁ト癒着セシヲ以テ、前キニ癒着部ヲ剝離シツ、其厚ク大ナルモノハ特ニゴムカテーテルニ二重結紮ヲ施シ切離セシニ際シ計ラズモ此ニ膀胱部ノ高ク存スルヲ識ラズ其混入セシ基底部分ヲ覺エズ切除セシモノナリキ、初ヨリ最モ意ヲ拂ヒタル膀胱此ノ如クニシテ損傷セラル遺憾痛切、乃チ縫合ヲ施シ全ク注入液ノ漏レ出ツルモノナキニ至ラシメ、更ニ腹腔ヲ清拭シ剝離面出血ノ有無周圍臟器ノ異常ヲ檢シ腸蹄係ヲ整復シ、終リニ甚タ遲緩セル腹壁ノ縫合ヲ爲シ切開口ヲ閉ツ、結紮糸四十條、時正ニ五時半ニシテ室温二十四度、脈搏百〇六至体温三十六度ニシテ格魯兒仿留謨二十五瓦、格魯兒仿留謨依的兒混合液四十五瓦ニ及ベリ、是ヨリ先キ術中脈搏微弱殆ン

ト之ヲ觸レ得ザルニ至リシコトアリシヲ以テ、四時十二分注射セシヲ初トシ「カンフル」依的兒皮下注射三筒、殺菌生理的食鹽水胸部注入五百五十瓦ニ及ビ爲ニ脉搏ノ聊カ快復スルヲ見タリ

術後ノ經過

正規的防腐繃帶ヲ施シ病床ニ移スヤ湯單保ヲ入レテ之ヲ溫保ス、患婦平穩脉搏微弱ニシテ緩徐ナリ、九時四十分左大腿内面五〇〇瓦、右大腿三〇〇瓦食鹽水注入ヲナシ畢ルヤ、一時四十四至ニ迄減弱セシ脉搏モ漸次其數ヲ増加シ少シク強實トナリテ百十至ヲ算スルニ及ビ、且ツ三十五度六分迄下降セシ体温モ漸次昇騰シテ三十八度トナルニ至レリ、麻酔ハ室ニ移シテヨリ程ナク醒覺シ、自ラ含嗽ヲ求メテ之ヲ爲スコト數回、時々輕度ノ咳嗽アリテ咽喉内ゴロノ音ヲ發スルモ發聲ニハ何等ノ障礙ナク、母親並ニ其同胞ニ低聲談話ヲ試ミ腹帶ヲ撫シテ腫瘤ノ既ニ除去セラレ甚タ縮小セルヲ喜ビ、カチテ諭セシ術后ノ注意ニ克ク遵ヒ痛苦ニ耐エ煩悶ノ狀ヲ忍ヒシト雖、只尿意ヲ訴フルモノアルニヨリ自ラ放尿センコトヲ以テセシモ能ク之ヲ爲シ難シト云ヒ試ニ導尿ヲ施セシモ特ニ得ル所ナカリキ此ノ如ク患婦安靜ニシテ惡心嘔吐ナク時々少量ノ鹽里母赤酒劑ヲ分服シ微弱ナル脉搏ヲ保チシガ、翌二十三日午前二時過頗ル細數トナリ百四十至ヲ數フルニ至リシモ漸次減退シテ四時九十二至、六時九十至、八時九十五至トナリ、体温亦三十六度二分、四時三十六度一分、六時三十七度一分ト爲リ更ニ八時三十八度四分ニ進ミタルモ、一般ノ容態夜來格別ノ變常ナク經過セリ、然ルニ八時四十分急ニ両眼定視、齒ヲ咬ミ緊ムト告ケシヲ以テ直ニ馳セテ之ヲ診ルニ最早萬事休矣、呼吸既ニ歇ミ微ニ心臟ノ搏動スルヲ聽取シ得ルノミニシテ終ニ眠ルカ如ク逝ケリ、其間眞ニ須臾、僅ニ一室ヲ隔テタル看護婦ノ其室ニ往復シタルニ過キズ、只是ヨリ先キ水ヲ乞フ所アリシモ母親ノ之ヲ遮リテ與ヘザルモノアリシト云フ

剖檢記事

金澤醫學專門學校病理解剖學教室ニ於ケル剖檢所見左ノ如シ

剖檢記錄

死後經由時間二十五時二十分

石川縣○川郡○野○村字中○

○田 ○め

明治十年七月六日生

右者石川縣金澤病院婦人科救恤患者トシテ入院受療中ノ處明治三十八年十二月二十三日午前八時四十分遂ニ死亡ノ轉歸ヲトレリ依テ制規ノ手續ヲ經タル上全月二十四日午前十時ヨリ本校構内病牀解剖室ニ於テ小原講師執刀ノ下ニ剖檢ヲ施行ス其所見次ノ如シ

第壹 外景検査

- 一、一女屍、体格強壯、營養可良、体重九八磅、
- 二、全身皮色一般ニ淡褐色ニシテ、屍斑ハ輕度ニ背部ニ存ス
- 三、死後強直ハ手腕及足跗關節ニ存スルノミ
- 四、頭部ニ變狀ナシ、顔面ニ於テハ臉、球結膜左右共ニ血管網充盈シ、角膜僅ニ溷濁、瞳孔ハ縮小シ、左右全大ナリ、外耳、鼻及其腔、口腔ニ變狀ナシ、頸部通常、胸部、乳房小ニシテ弛緩シ、乳嘴ハ突出ス、腹部一般ニ壁弛緩著シク且ツ凹陷ス、白條ニ沿ヒ胸骨劔狀突起ノ直下ヨリ下方一五、〇浬、耻骨縫際ヨリ上方約六、〇浬ノ間ニ亘リ四

○、○ 瘻長ノ一縫合創アリ、茲ニ四〇ノ縫合糸ヲ存シ、創ノ周圍、創縁ニハ沃度仿留謨末及少許ノ赤褐色凝血塊ヲ附着ス、而シテ創ハ未タ癒合起ラズシテ容易ニ離開シ得ベク、創面ニハ少許淡褐色凝血塊ヲ附着スルモ頗ル滑澤、清潔ニシテ縁モ亦銳利ナリ、大陰唇ハ比較的小ナルノ外變狀ナシ、背部變狀ナク、四肢、下肢殊ニ上腿上部ニ於テハ皮膚一般ニ緊滿シ、著明ニ皮下靜脉ノ怒張ヲ透見ス

第貳 內景検査

甲 胸腹腔開檢

五、式ニ從ヒ胸腹軟部ヲ切開スルニ、皮下脂肪層及筋層ノ發育可良ニシテ筋色ヤ、淡ナリ
 胸廓ハ其形扁平ニシテ、肋間ハ狹ク、胸骨下部ハ左方ニ偏倚ス腹腔内ニハ暗赤色ノ流動性血液三五〇、○ 瘻ヲ含有ス、大網膜ニハ脂肪ノ沈着ヤ、多ク、一般ニ血管網ノ充盈著シ、其右縁ノ大部ハ右側腹壁ト索狀ノ癒着ヲ呈シ、又中部以下縁ハ前腹壁ト所々癒着ス。胃及腸管ハ瓦斯ヲ以テ著シク膨滿シ、肝臟ハ肋骨弓下縁ヨリ深ク上方ニアリ、脾臟モ亦後上方ニ偏位ス、膀胱ハ其底部ニ於テ畧ボ前後(矢狀徑)ニ走レル長サ七、○ 瘻ノ不正ナル縫合創一ヶアリ創縁ニ少許ノ流動血ヲ附シ、創ハ容易ニ剝離シ得ベシ、而シテ其創面ハ滑澤、清潔ナリ、子宮、廣韌帶、卵巢、輸卵管ハスベテ欠損シ、膈ノ頂部ニ於テ不正ナル一縫合創存シ、腔ハ之カ爲ニ盲端ニ終レリ、此創面モ亦清潔ナルモ縁ハ不正ナリ、腹壁腹膜ハ一般ニ著シク肥厚シ、血管ノ出現、充盈顯著ナリ、而シテ所々ニ索狀物ヲ附ス、此索狀物及上記大網膜ノ腹壁癒着部ニハ多量ノ暗赤色凝血ヲ附着セリ、前腹壁腹膜ニハ所々ニ多數ノ出血點アリ、且ツ腹壁ノ左側ニテ臍部ノ高サニテ二ヶ、右側盲腸部ニテ二個及骨盤腔内ニ二ヶノ護謨細管ヲ以テ索狀物ヲ結紮セル所アリ、骨盤腔腹膜ハ一般ニ血管充盈シ、又多數ノ出血斑、凝血ヲ認ム、橫隔膜ノ高サハ左側第三肋間、右側第三肋間

ノ上縁ニ一致ス、

其 一 胸 腔 臟 器

六、胸腔ヲ開檢スルニ前縦隔洞ノ淋巴腺ハ多數腫起シ且ツ硬固ナリ、両肺ノ前縁ハヨク露出ス、肋膜ニ癒着ナク、胸腔ニ異常ノ内容ナシ

七、心嚢ヲ開檢スルニ心嚢内ニハ淡黃色ノ稀薄液二〇、〇㍉ヲ含有ス、心嚢内面ノ前部ハ蒼白滑澤ニシテ、後部ハ少シク白色ノ溷濁ヲ呈ス

八、心臟ノ大サ本屍ノ手拳大ヨリ稍大ニシテ、心臟外膜下ニ脂肪ノ沈着多ク、右心ハ軟ニシテ、左心ハ硬シ、右房ノ前面ニ於テ一個ノ臃斑アリ、右心内ニハ豚脂様物ヲ混スル暗色ノ軟凝血多量ヲ含有シ、房室間孔二指ヲ通スルコトヲ得、左心内ニ亦全狀ノ血液少量ヲ含存シ、房室間孔二指ヲ通ジ得ヘシ、心臟ヲ摘出シテ大動脈及肺動脈ノ斷端ヨリ、水ヲ注クニ各半月狀弁ヨク閉鎖ス、右室内膜滑澤、所々ニ黃色ノ斑アリ、弁膜裝置柔ニシテ變狀ナシ、左心内膜亦滑澤ナレトモ所々ニ黃色ノ斑点狀溷濁アリ、大動脈圓錐部ノ内膜ハ少シク白色ノ溷濁ヲ呈ス、乳嘴筋少シク肥大ス、僧帽弁及大動脈弁ノ邊緣稍肥厚シ、大動脈起根部内面ニ少數ノ黃色ノ斑アリ、心筋ノ色淡褐色ニシテ其壁厚徑左室一、二右室〇、四㍉ナリ、心臟ノ重量二四〇、〇㍉

九、左肺ヲ摘出シテ檢スルニヨク膨滿シ、肋膜面ニ微細血管ノ充盈及所々ニ出血斑ヲ認ム、按壓スルニヨク嚙嚙ヲ感シ、硬結竈ヲ觸レズ、斷面ノ血量中等、壓ニヨリテ泡沫液ヲ流出ス、氣管支ノ内面淡赤色、氣管支腺少シク腫大シ、斷面カタキ乾酪様物存シ、其周圍ニハ石灰ノ沈着ヲ認ム、右肺モ亦ヨク膨滿シ、肋膜面ノ狀況左ニ全シ、上葉ノ前面ニ於テ豌豆大ノ氣胞一ヶ存在ス、按壓スルニ嚙嚙ヲ感シ、硬結竈ナシ、上葉及中葉ノ斷面ハ血量少ク、下葉

ノ斷面ハ血量ニ富饒ス、氣管支内ニハ灰白色ノ粘液ヲ附シ、内面左ニ全シ、氣管支腺腫大シ、斷面少シク濾胞ノ腫大アリ

其 二 腹腔臟器及骨盤腔臟器

一〇、脾臟ノ大サ二三、五―六、〇―一二、八、表面ニハ多數ノ大ナル皺襞アリ、斷面血量ニ乏シク、脾材、脾髓ノ別明カナリ、腹膜被包下ニ多數ノ出血点存シ、質一般ニ軟ナリ、重量一五〇、〇瓦

一一、十二指腸内ニハ黃色ノ粘稠液少許ヲ含有シ、粘膜ニ變狀ナシ、總輸胆管ヨク開通ス

一二、胃内ニハ汚穢灰白綠色ノ液狀内容凡ソ一〇〇、〇㌘ヲ含有ス、内面一般ニ粘液ヲ附シ、胃底部ニ於テ直徑三、

〇㌘大ノ圓形暗綠色部アリ

一三、肝臟ノ大サ二四、〇―一五、〇―七、〇㌘、右葉ノ上面前部ニ於テ數條ノ肋骨壓痕アリ、又右葉上面ノ中部腹膜下ニ於テ一個小豆大暗赤色結節アリ、左葉上面ノ前縁ニ接シ、三角形ノ帶褐色部アリ、斷面一般ニ血量ニ乏シク、帶黃灰白色ヲ呈ス、右葉小結節ノ斷面ハ暗赤色ノ凝血ヲ有スル海綿樣小結節ニシテ、左葉三角形部ニハ血量他ヨリモ乏シ、胆嚢内ニハ帶褐暗綠色ノ粘稠液ヲ有シ、内面變狀ナシ、胆嚢管ニモ異常ヲ認メズ

肝臟ノ重量一一九〇、〇瓦ヲ算ス

一四、腸間膜腺ニ變狀ナシ、小腸廻盲部内面ニ小ナル出血斑アリ、盲腸内ニハ鞭毛虫數條存ス、其他腸管ニ變狀ヲ認メズ

一五、兩腎及兩側輸尿管、膀胱、其他殘存セル骨盤腔内生殖器、直腸等ヲ附着ノ儘摘出シテ檢スルニ、右腎ハ通常ヨリモ左側ニ比シテ小ニシテ、全側輸尿管ハ著シク、長ク、且ツ太クシテ壁肥厚ヲ呈セリ、膀胱ニハ上記ノ如キ縫

合創一ヶアリ、内ニ尿ヲ含存セズ

左腎ハ莢膜ノ剝離困難ニシテ、質軟、大サ一二、二一六、五一三、六厘、断面血量ニ乏シク皮質、髓質共ニ少シク溷濁アリ、腎盂内ニ溷濁シタル黄色尿少許ヲ含ム、右腎ノ大サ九、〇一四、七一二、八厘、断面血量ニ乏シク、皮質層菲薄、髓質ハ僅ニ殘遺シ、腎盞、腎盂ノ部分ハ擴張シテ一ノ嚢ヲナシ、内ニ黄色尿ヲ存ス、質ノ硬度少シク軟、

左側輸尿管ノ長サ三二、〇厘、右側輸尿管ハ四六、〇厘ヲ有ス骨盤腔諸組織ニハ暗褐色ノ凝血、流動性血液ニヨリ浸染セラル

一六、胸、腹部大動脈ヲ開檢スルニ、腹部ニ於テ其總腸骨動脈ニ分岐スル直上部後壁ニ少數ノ黄色斑点アリ

以上ニテ剖檢ヲ終ル于時午後一時十分

解剖上診斷

子宮、卵巢、廣韌帶、輸卵管、手術ニヨレル缺損、腹壁及膀胱ノ手術ニ於ケル縫合創、腹壁腹膜ノ肥厚及癒着（一部分剝離）、腹腔内血液ノ含存（癒着部剝離部分ヨリノ出血？）、肺肋膜下、脾腹膜下及小腸粘膜下ノ出血点、諸臓器血液含有量減少、右腎萎縮及水腎、全側輸尿管ノ延長、管壁肥厚（壓迫ニヨレル）、心臟外膜ノ腱斑、左右室内膜下筋肉ノ脂肪斑、左室乳嘴筋輕度ノ肥大、僧帽弁、大動脈半月狀弁ノ肥厚、大動脈内膜ノ硬變（輕度）、氣管支腺腫大、肝右葉ノ肋骨壓痕及右葉上面ノ血管腫、盲腸内鞭毛蟲寄生、

死 因

衰弱

* * * * *

腫瘍所見

肉眼の所見 摘出セル腫瘍ハ稍暗赤色ヲ呈シ其形橙實狀ニシテ少シク前後ニ壓平シ、剝離セル癒着部ノ外表面一体ニ平等滑澤ナルモ諸所ニ胡桃大ヨリ鵝卵大ニ至ル隆起アリ、表層血管縱横ニ蜿蜒蛇行スルモ比較的大ナルモノ無シ、腫瘍ノ下方ハ兒頭大ニ膨垂シ上方ハ子宮基部ヲ狹ンテ殆ント對角的ニ凸隆シ、左側(左右ハ卵巢ノ左右即チ生體ノ左右ニ準フ)ハ右側ヨリモ大ニシテ大人頭大ナリ、此兩上角ハ左右季肋部ニ進入シ右ハ肝臟ヲ壓上シ左ハ高ク横膈膜下ニ達シタルモノニシテ、腫瘍ハ全部一樣ノ硬度ヲ有シ稍弾力性ヲ帶ビ少シク假性ノ波動ヲ呈ス

子宮ハ腫瘍ノ後面ニ其形狀ヲ現ハシ正中ヨリモ少シク右ニ偏ス、而シテ牽引舉上薦骨穹窿面ヲ越エテ高ク薦骨岬部ニ達セシ子宮腔部ハ其中部ニ存シ稍小ニシテ少ク前後ニ壓平シ裂痕ヲ認ムルコトナク正狀ニシテ外口横裂ヲ呈シ懸垂スルコト一仙迷、前唇ハ後唇ヨリモ○、五仙迷低位ニ在リ、且ツ腫瘍ノ増大ニ伴ヒ延長肥大セル楔狀ノ宮體ハ弓形ヲ畫キテ稍斜ニ後上方ヲ中央ニ走リテ兩上角ノ間ニ達ス、即チ子宮ハ腫瘍後面ノ一部トシテ自ラ其後面ヲ顯スモノニシテ、兩側方ハ稍陷凹セル溝狀ノ區隔ニヨリ自然ニ腫瘍壁ニ移行ス、而シテ宮底部ハ敢テ隆起セル邊緣ヲ有セズ廣潤平等ニシテ、側方ヨリ發スル輸卵管ノ存在ニヨリ之ヲ確定シ得ルニ止マリ、實質ハ更ニ弓狀ヲナシテ腫瘍前面ニ出テ恰モ腫瘍中部ヲ前後ニ着帶セシカ如ク正中ヲ下走シテ自然ニ移行ヲナス

延長シタル輸卵管ハ子宮ト正シキ丁字形ヲナサズシテ斜ニ之ト交叉シ、右側ハ子宮ノ方向ト約百三十五度ノ鈍角ヲ以テ右上角ノ前底部ヲ右前下方ニ走リ左側ハ約三十五度ノ銳角ヲ以テ左上角ノ後底部ヲ左後下方ニ走ル、兩側卵巢亦之ニ一致シテ存シ増大スルコト倍大以上ニ及ビ扁平長圓形ニシテ淡紅白色、排卵ノ痕數個ヲ認ム

斷面―左右ノ長徑ニ從テ腫瘍ヲ割斷スルニ初メ刀ヲ下スニ當リ少シク抵抗ヲ感スルモ之ヲ進ムルニ及ヒ一般ニ肉腫

組織ヲ切斷スルヨリモ尙軟弱ナルヲ覺エ且ツ出血スルコト多カラス、即チ外壁ハ剝離シ得ベキ稍厚キ硬靱ナル臃樣カプセル並ニ一種ノ肉樣組織ヨリ成リ其厚薄各部一樣ナラズ、內部ハ明カニ之ト區別シ得ル多量ノ淡紅灰白色稍脆キ鬆粗ナル組織ト浮腫樣透明ナル膠樣ノ物質ヨリ成リ網狀ヲ呈スル美麗ナル紋理ヲ顯ハシ其兩質ノ配合ハ各部分量のニ多少差異ナキニアラザルモ中部ニ至ルト外方ニ偏スルトヲ間ハス殆ント大同小異ニシテ、囊腫狀空洞形成ノ如キ全ク之ヲ見ルコトナシ、斯ル所見ハ兩上角ノ斷面並ニ其他ノ斷面皆同樣ノ觀ヲ呈ス

更ニ子宮體ノ方向ニ一致シ宮腔ニ沿ヒ稍斜ニ之ヲ前後斷スルニ、殊ニ其頸部ニ於テ延長セラレタル子宮ハ暗赤褐色ヲ呈シ廣汎ナル接續ヲ以テ腫瘍實質ト連リ、筋幅廣キ所三、仙迷狹キ所二、仙迷ニシテ宮腔ハ殆ント其中央ヲ走リ長サ十八、五仙迷ニ達ス、而シテ宮體前壁ノ筋層ハ腫瘍實質ト稍判然タル限界ヲナスモ最外層ノ一部ハ自然ニ腫瘍實質ニ移行シ之ト混同ス、加之宮體實質ノ大部ハ更ニ張翼狀ニ周圍ニ赴クニ從ヒ漸々菲薄トナリ所謂肉樣組織トシテ延長包圍シ、内ハ一部腫瘍實質ニ移行シ外ハカプセルト鬆粗ノ癒着ヲナス

長軸ニ從テ卵巢ヲ縱斷スルニ、左右各其中央部ニ當リ卵胞水腫ト認ムヘキ右ニハ豌豆大ノ一個左ニハ隱元豆大、大豆大二個ノ空胞ヲ有シ、右ヨリハ水樣液、左ヨリハ粘稠ナル膠樣液ヲ漏ラセリ、又輸卵管ニハ左右共ニ斯ル水腫或ハ血腫ノ如キ變常ヲ認ムルコトナシ

腫瘍ノ大サ並ニ重量等左ノ如シ

橫徑(左右)

四五、cm

上下徑

三一、cm(最大徑三七、)cm

腫瘍

(部央中)

前後徑

三四、cm

最大徑(斜徑) 四七、cm

重量八貫六百六十匁(三十二基、六〇〇匁)

子宮

子宮腔部後層	二〇、cm	底部頂點ニ於ケル廣サ	約八、cm
子宮底部頂點間		子宮腔部前後徑	一、六cm
基底部頂點ト宮腔部後層間中央部ノ廣サ	約七、cm	左右徑	一、六cm
縱斷面ニ於ケル子宮筋層ノ廣サ	最廣部 三、cm	中央部	二、cm
		基底頂部	二、cm

左右兩剪彩外端 四四、五cm

右側 二〇、五cm
左側 二四、cm

右輸卵管 長サ一八、五cm

最廣キ嚢狀部橫斷面 長徑 〇〇、八cm
短徑 〇〇、七cm

峽部中央橫斷面

長徑 〇〇、五cm
短徑 〇〇、四cm

左輸卵管 長サ二二、cm

最廣キ嚢狀部橫斷面 長徑 一〇、〇cm
短徑 〇〇、七cm

峽部中央橫斷面

長徑 〇〇、五cm
短徑 〇〇、三cm

輸卵管及卵巢

左右兩卵巢外端 三三、五cm

右側 一六、五cm
左側 一七、cm

右卵巢 長徑 七、cm

短徑 二、五cm 厚徑 一、cm

左卵巢 長徑 七、五cm

短徑 二、二cm 厚徑 一、cm

顯微鏡的所見 標本作製ハ凡テフオルマリン及亞爾爾個保兒ニテ固定硬化シ、ツエルロイチンニテ封固シタル後之ヲ薄切シ、ヘマトキシリン、エオデン重複染色ヲ施シタルモノナリ

先ツ腫瘍前面ノ一部ヨリ切片ヲ採リ之ヲ檢スルニ、腫瘍ヲ被包スル外面ノカプセルハ縱走ノ並列セル疎大ノ結締組織維ヨリ成リ次層ノ境界部ニ少量ノ血管ヲ有シ、第二層ハ子宮實質ノ一部ト認メラルヘキ滑平筋纖維ノ横斷セラレ

タルモノ縦斷セラレタルモノ或ハ斜斷セラレタルモノ、相交錯セルモノヨリ成リ、細弱ナルモ比較的の多クノ血管ヲ有ス、之ニ次テ腫瘍ノ固有成分ト見ルヘキ多大ナル部分ハ其下位ヲ占メ主トシテ配列一様ナラザル太キ結締組織束其ノ成分ヲ成シ結締組織小體ハ比較的少量ナリ、肉眼的ニ浮腫狀ヲ呈セル透明ナル場所ハ多量ノ粘液様或ハ漿液様液體ノ爲ニ各纖維相分離シ細胞亦著シク膨脹シ且ツ星芒狀粘液細胞ノ互ニ網狀ヲナス所アリ、其他尙膠様無組織ニ變化セル部分ヲ認メ血管含有量少ナシ、而シテ此等各層ノ境界移行部ハ稍明ナルモ組織相錯雜シ判然タル像ヲ呈セサル所アリ、此第三層ノ所見ハ腫瘍實質各部ヨリ得タルモノニ就テ亦同様ナルヲ見ルナリ

次ニ子宮基底ニ近キ宮體後壁ノ腹膜層ヨリ宮腔及前壁ニ至ル切片ヲ取り之カ横斷面ヲ見ルニ、肉眼上宮腔ハ三角形ヲ呈シ粘膜層ト筋層トハ其區別分明ニシテ粘膜ハ其最厚キ處約二、五ミリメートルニ及フ、而シテ後壁ハ薄キ結締組織纖維ノ下、其滑平筋組織ハ初メ縱橫斷次ニ横斷更ニ縱斷セラレタル層面ヲ顯ハシ、血管中等ニシテ中層ニ在リ、粘膜層ハ孤立又ハ稍群ヲナセル圓形卵圓形或ハ灣曲セル腺簇ヲ呈シ整然タル單層柱狀上皮ヲ以テ被ハル、モ固有膜ヲ越エテ筋層内ニ侵入セントスルモノナク、血管ノ含有多カラサルモ圓形細胞ノ浸潤稍著明ナリ

更ニ子宮前壁ヨリ腫瘍實質ニ亘ル切片ヲ取り之ヲ見ルニ、前壁ノ筋層ハ後壁ト少シク其排列ヲ異ニシ粘膜ニ近キ最内層ハ同様ナルモ中層ハ輪狀ノ筋纖維及血管少ナク、外層ハ全ク縱走ノ纖維ノミヨリ成リ漸次其量ヲ減スルト共ニ之ニ交フルニ縱走ノ結締組織纖維束ヲ以テシ、腫瘍實質ニ近接スルニ從ヒ遂ニ全ク結締組織纖維ノミトナリ更ニ固有ノ腫瘍成分ニ移行ス

卵巢―卵濾胞ノ形成一体ニ少ナク又大ナルモノヲ見ス、皮質ハ髓質ニ比シ其成分少シク減少ノ看ヲ呈シ、血管ハ髓質ニ於テ多量ニ之ヲ見殊ニ左側卵巢ニ於テ多量ナルカ如シ、彼ノ囊腫狀ノ卵胞水腫ハ胞膜ヲ以テ周匝セラレ内面ニ

數層ノ細胞ヨリ成ル顆粒膜ヲ附ス、而シテ輸卵管ハ左右其腰部及嚢狀部ニ於テ其横斷面ヲ見ルニ各膜ノ關係並ニ內腔ノ狀態健康輸卵管組織ト異ル所ヲ見ザルナリ

以上述タル各所見ヲ參照スレハ腹膜下ニ近キ子宮間質ヨリ發生セル粘液纖維性筋腫タルヲ知ルニ足ランカ

* * * * *

思フニ子宮筋腫ハ其發生ノ原因今日尙不明ニシテ從來種々ノ推想ナキニアラザルモ未タ信憑スヘキ一定ノ確說ナシ、而シテ今ヨリ凡ソ六十餘年前 Julius Vogel 氏ガ精細ナル組織學上ノ検査ヲ施シ筋腫 (Myom) 又ハ滑平筋腫 (Leiomyom) ナル名稱ヲ下セシヨリ其滑平筋纖維ヨリ成ルコトヲ知ルニ至レリト雖、而モ臨床上吾人カ實驗スル子宮筋腫ト稱スルモノニ於テハ單ニ筋纖維ノミヨリ成ルモノハ殆ント全ク無ク、多クハ之ニ結締組織纖維ヲ混シ、其纖維ノ交互混合スル關係ニヨリ最多ク纖維性筋腫トナリ或ハ稀ニ纖維腫トナリ、其間硬軟種々ノ別ヲ生スルヲ見ルナリ

斯ル筋腫ハ其發生部位ノ如何ニヨリ發育ノ緩急遲速、形狀、大小、方向、之カ爲ニ生スル症狀、經過等ヲ異ニスルモノニシテ、其壁内性タルト腹膜又ハ粘膜ニ近接スルトニヨリ或ハ間質性筋腫 (Interstitialis Myom)、腹膜下筋腫 (Subperitoneales Myom)、粘膜下筋腫 (Submucosae Myom) ニ區別シ、又ハ体部筋腫 (Corpusmyom) 及頸部筋腫 (Cervixmyom) トナス、就中屢發生ノ基點トナリ且ツ最も大ナル容積ニ達スルモノハ間質性ニシテ殊ニ基底ニ近キ後壁ニ發スルコト最多ク、基底、前壁之ニ次キ頸部最も少ナシト云フ

一汎ニ信スル處ニ依レハ筋腫ノ生長ハ女子生殖力存在期ニ隨伴スト云ヒ、Strassmann 氏ノ如キハ通經子宮ノ定型的腫瘍ナリト云ヒ、Peter Müller 及 Faber Johnston 氏等ニヨレハ經閉期後ニ生長セサルノミナラス又發生セザルモ

ノナリト云ヒ、Holmeier氏ノ如キ閉經後ノ實質増大ヲ近隣臟器殊ニ網膜癒着ニヨリ之ヨリ榮養ヲ受クル爲ナリト云ヘリ、固ヨリ筋腫ト年齡並ニ經血トノ關係ハ其間密ナルモノアリ、且ツ腹腔ニ向テ増生挺出スルモノニ在テハ壓迫牽引又ハ根蒂ノ軸旋等ニヨリ炎症症狀ヲ發シ腹壁腹膜、網膜、腸管等ト癒着ヲ起シ之ヨリ生スル血管ヨリ新ニ榮養ヲ供給セラレ増大スルコトナキニアラズト雖只其生長ハ極テ徐々ニシテ結締組織ノ多寡ト血管増殖ノ多少トハ其生長ノ遲速ニ向テ與ツテ力アリ、而シテ時トシテ急ニ異常ナル増大ヲナスコトアルハ是レ一ニ腫瘍實質ノ増生ニ因ルニアラスシテ却テ之カ組織液ノ異常ナル増生或ハ他ノ病的變性又ハ腫瘍ノ混合發生ニ基クモノナリ、例者囊腫性筋腫殊ニ淋巴管擴張性筋腫、或ハ粘液組織變性或ハ肉腫性筋腫等ニ於ケルカ如キ是ナリ

蓋シ腫瘍ノ増生ハ最モ抵抗少ナキ方向ニ進ムモノニシテ、周圍臟器ノ之カ爲ニ受クル影響ハ其發生部位ヨリモ寧ロ其大小ニ關係ヲ有シ、子宮ノ之カ爲ニ受クル障害ハ其大小ヨリモ反ツテ發生部位ニ關係ヲ有ス、即チ之ヨリ起ル要徴ハ全ク其大小ニ關係セズシテ假令腫瘍小ナルモ劇烈ナル苦痛ニ惱ム者アリ又之ニ反シテ腫瘍大ナルモ殆ント困難症ヲ逞クセサルモノアルナリ

而シテ今此一例ノ如キハ未タ婚嫁セザル中年ノ未妊婦ニシテ、其發生原期ノ如キ素ヨリ之ヲ窺フニ足ラスト雖、自覺的之ヲ覈知セシヨリ漸ク滿五ケ年ニ過キスシテ其急ニ増大ノ傾向ヲ呈シタル墮ニ二年ノ歲月ヲ經タルニ過ギズ、初メ少シク壓迫性膀胱障害ヲ呈セシコトアルモ其最多ク且ツ最早ク障害ヲ來スヘキ月經ハ其持長日數並ニ血量却テ少ナキニ係ラス毎月整然トシテ潮來シ殆ント順調ト稱シ得ベク又疼痛、麻痺等何等ノ神經的障害ナク、唯腹部ノ膨大スルニ從ヒ體動敏活ヲ欠キ坐作進退不自由ヲ感セシモ尙數町ノ間支杖ナクシテ能ク歩行ニ耐エ、呼吸、消化、血行器亦認ムヘキ症狀ナク極テ佳良ニ而モ比較的急速ニ經過シタル者ナリ、加之其腫瘍ノ所見ニ因レバ腹膜ニ近キ子

宮體前壁ノ間質ヨリ發生シタルモノニシテ發育ニ從ヒ外方ニ聳出シテ宛然腹膜下性狀態ヲ呈シ、廣汎ナル連續ヲ以テ宮體ヲ牽引シツ、厚キ筋層ニテ腹腔ト隔タリ其間直接宮腔ト關係スルコトナク、且ツ腹部膨滿ノ結果外襲性癒着ヲ起シ腹壁腹膜、網膜等ヨリ新ニ血液ノ支給ヲ受ケテ益増大ヲ來シ、之ニ伴フニ實質内細胞ノ分解並ニ細胞間粘液ノ析出ニヨリ漸次粘液變性ヲ呈シ此ノ如ク頗ル巨大ナルモノトナリタルヲ知ルナリ

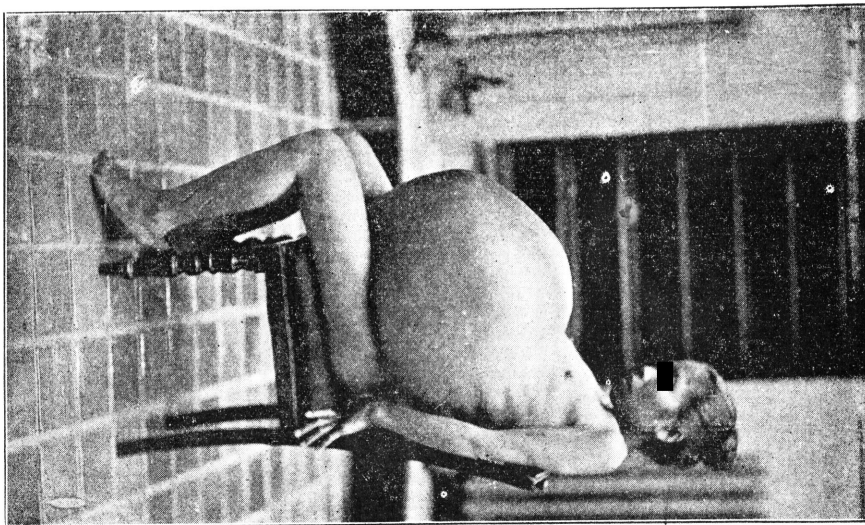
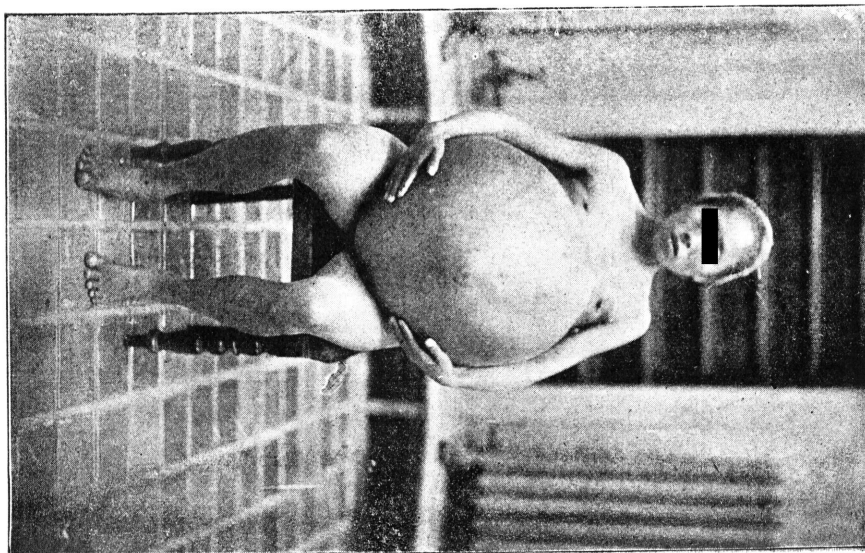
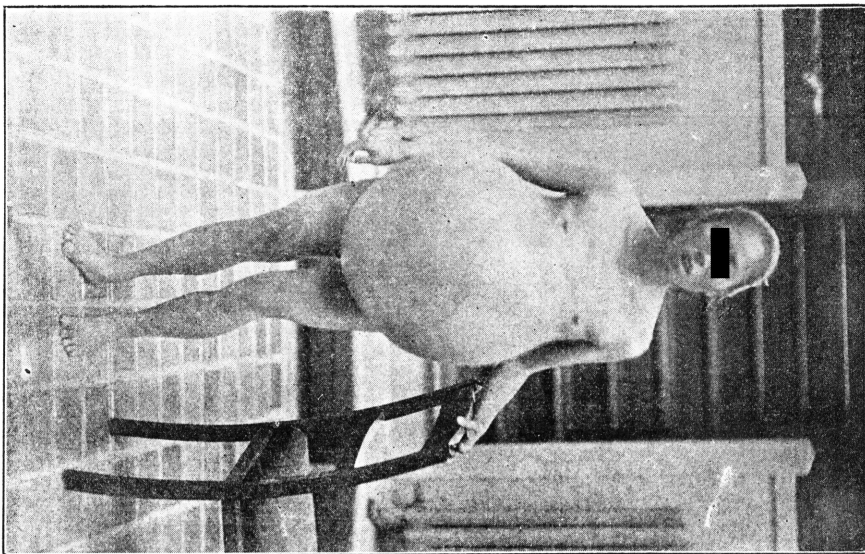
終ニ臨ンテ前外科部員冲野彌一郎氏並ニ其後任田中一次郎氏ノ生前及摘出セル腫瘍撮影ノ好意ヲ謝シ併セテ小西俊三氏ノ示教ヲ謝ス、只腫瘍撮影ニ就テハ嘗テ一度之ヲ試ミタルコトアルモ現象判明ヲ欠ク所アリシヲ以テ、今回特ニ田中氏ニ乞ヒ歲餘ヲ經タルフオルマリシ液貯藏ノ硬化セルモノニ就テ撮影シタルモノナリ

(明治三十九年十二月稿)

附 錄

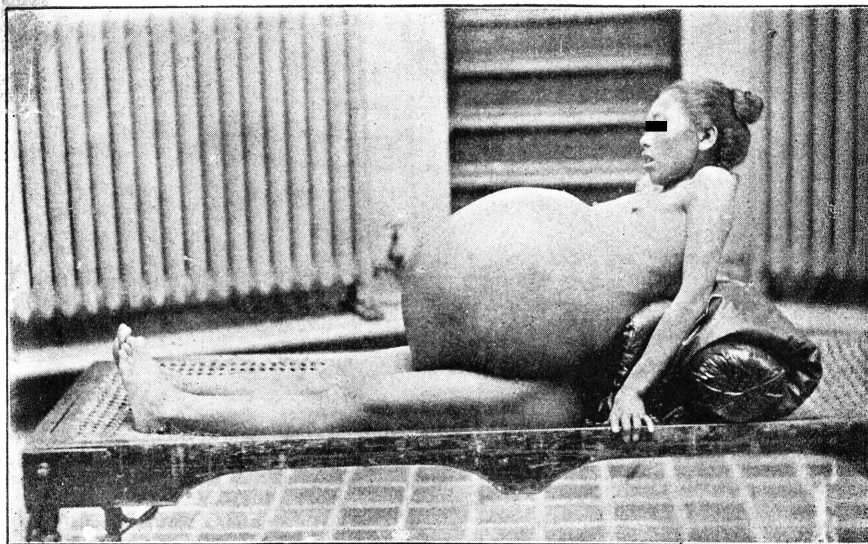
今春小川教授會々左ノ寸牘ヲ發シテ日夕斯學ニ從事セラル、先學諸氏ノ實驗報告ヲ聞キ聊カ各地方ニ於ケル狀況ヲ知悉セラレンカ爲メ廣ク其回答ヲ覓メラル、モノ四十二及ヘリ、而シテ公私多忙ノ間特ニ返信ヲ寄セラル、モノ十有六氏、今教授ノ許諾ヲ得長ヘニ其好意ヲ謝シ併セテ大方學者ノ參考ニ資セント欲シ其全文ヲ掲ケテ以テ附録トナス

拜啓嚴寒ノ候益御清祥奉賀候陳者從來親シク手術被爲候子宮並ニ卵巢ヨリ發生セル實質性腫瘍中最大最重ナリシ各一例ニ就テ乍御手數左記



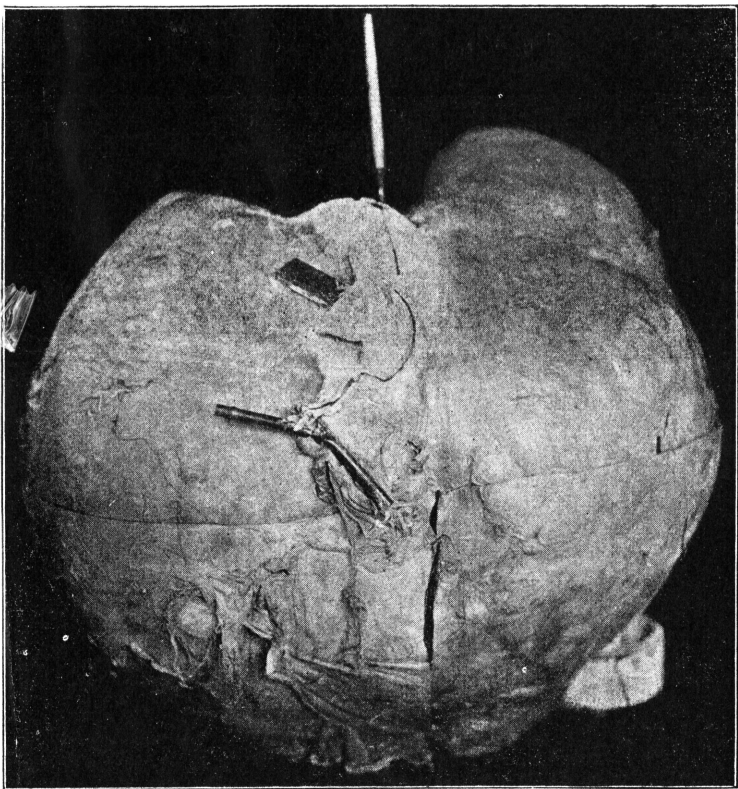
態狀ノ部腹ルケ於ニ位體各圖四第至乃圖一第

圖四第



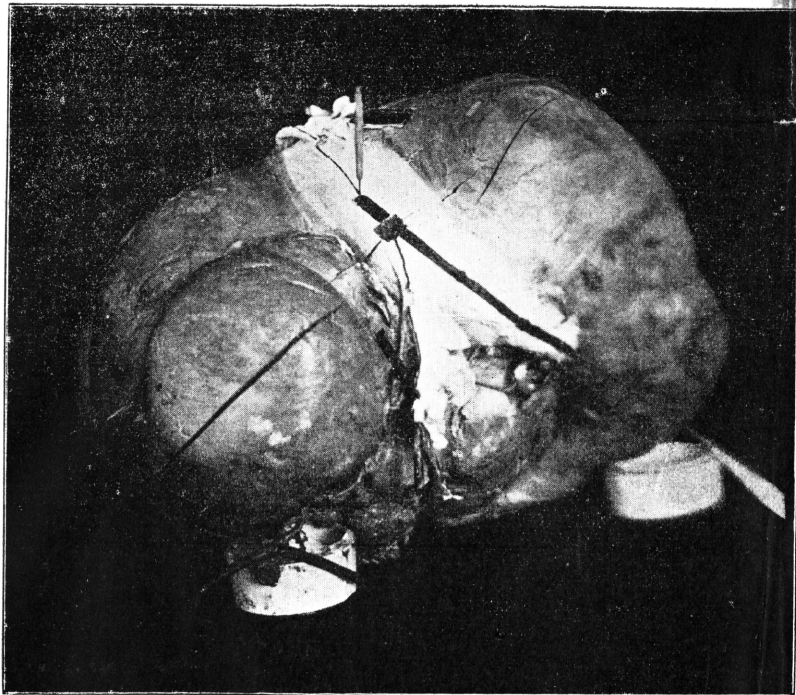
日一廿月二十年八十三治明ルナ日前術手上以
(影攝氏野沖テ於ニ室術手通普科外)

圖五第



ノモルタ見リヨ面正ヲ瘍腫ルセ出摘
ス示ヲ點頂部底基宮子ハ針刺テシニ

圖六第



其及係關ノ管卵輸・巢卵ニ並宮子テシニノモルタ見リヨ方上左稍
子テシニノモルタシ示ヲ向方ノ其テニ汁墨ハ線黑) ス示ヲ向方
(リセニ明ヲ係關其シナト色白シ布撒ヲ末粉澱ハ管卵輸・巢卵・宮

圖七第



ノ宮子ニ更後ルタシ斷縦ヲ部半下ルセ斷横ニ後前
ス示ヲ面斷各シセ横縦ニ斜稍ニ沿ニ向方
(影攝氏中田日七廿月二十年九十三治明上以)

條項御答示願度此段得貴意候

一、患婦ノ年齡並初發以來ノ年數

二、結婚、分娩ノ有無並分娩回数

三、發生部並診斷

四、腫瘍ノ重量、大サ、形狀

五、手術年月日並其成績

六、若シ既ニ報告ノモノナレバ其報告雜誌ノ名稱號數、年月

明治三十九年一月廿五日 石川縣金澤病院婦人科 小川 勝 陳

濱田玄達—辻高俊 木下正中—磐瀨雄一 千葉稔次郎—中島襄吉 楠田謙藏 伊庭秀榮 榊順次郎 櫻井郁次郎

慈惠病院(東京) 吾妻勝剛 足立健三郎 秋元隆次郎 佐伯理一郎(京都) 高山尙平(福岡) 柳琢磨 河野徹志

緒方正清 大坂高等醫學校(大坂) 多田學三郎 北川乙次郎—佐藤勤也 柴田耕一(名古屋) 今淵恒壽(千葉)

栗原永之助(仙台) 熊谷省之助 石川又次郎(岡山) 山田謙治(金澤) 櫻井三之助(長崎) 北畠孝夫(下ノ關)

山崎正董(熊本) 池田陽一(佐賀) 藤野正太郎(函館) 高橋辰五郎(新潟) 今井政公(長野) 札幌病院 山口病

院 廣島病院 青森病院 松山病院 神戸病院 台灣總督府醫學校台北醫院

右ハ往復端書ヲ發シタル芳名ニシテ其中返信ヲ寄セラレシモノ左ノ如シ

(原著及實驗)

三

子宮					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 手 術 年 月 日 等	六 誌 名 等
31j (白覺的 2j前?)	18j Geburt ナシ	Cervix, Birnformig = シラ Veit Handbuch ニ記載圖ト同シ Cervix myom	1285gr, Länge 16cm, Breite 10cm, Umfang 37cm(中央ノ部)	22/ IX 1904	Gebelit

巢 卵					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 手 術 年 月 日 等	六 誌 名 等
41j (白覺的 半年前?)	23j 初婚 27j 再婚 Gebürt 2+	右 Ovarium, (Ovarial Sarcom Endotheliom?)	725gr, Länge 14cm, Dicke 7.5 Breite 12cm,	26/ IX 1905	半治退院 恐ラク腹膜移轉ヨリ豫后不良

明治三十九年二月一日

廣島縣廣島病院婦人科

中西武彦

子宮					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 手 術 年 月 日 等	六 誌 名 等
御問合ノ件取調ベ候ヘ共是マデ著シク大 ナリト思フ程ノ實質性ノ腫瘍ヲ取出シタ ル事無之頭大ノ筋腫位ガ最モ大ナル位ニ 有之夫レトモ一々記載致シ置カズ候儘 折角御尋ニ候ヘ共充分ニ御回答申兼候間 不惡御了承奉願候					二月一日 山口縣病院 吉野吉夫

子宮					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 手 術 年 月 日 等	六 誌 名 等
小生手術セシ腫瘍ニハ格別巨大ノモノ無 之最大ニシテ頭大位ノミオフィブローム ノミニ御座候右貴答迄匆匆 餘リ小ナルモノ故詳細ノ記載ヲ畧シ申候					二月二日 長野市 今井政公

子 宮 (卵 巢)

一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
------------------	------------------	------------------	------------------	--------------------------------------	------------------

小生ハ止善堂ニテハ未タ左ノミ大ナルモ
ノ、實驗無之候事ニテ從テ御答申スベキ
記載無之候ガ嘗テ金澤病院ニアリシ際手
術致候モノハ餘程大ナリシト覺エ候名年
杯不覺ニ候ガ岡田剛吉氏ハ覺居候カト存
候腫瘍ハ Fibromyoma ニテ腸腫瘍内ニ竄
入融合致シ手術ヲ仰止致候モ腹部ノ縫合
困難ニテ彼是ニテ三四時ヲ費シ遂ニ其儘
死亡致候其後計リ候ニ腫瘍ノ量目ガ八貫
余ニテ全身量ガ其以下ナリシト覺フ

二月五日

Yamada.

子 宮 (卵 巢)

一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
------------------	------------------	------------------	------------------	--------------------------------------	------------------

當院ニハ是迄ニハ確實ノ記載見當リ不申
候右御返事迄草々頓首

二月七日

大阪高等醫學校

緒方十右衛門

子 宮

一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
------------------	------------------	------------------	------------------	--------------------------------------	------------------

S. 中野(明治卅六年三月) 四十年
初發不明
二十四歲結婚 三十五年十月月經閉止
初回妊娠
子宮左側上部腹膜下纖維瘤ノ妊娠ニ由リ
速ニ増大セシ者
卵圓形表面不平、重參千參百七十五瓦、
長徑二六、五仙迷 周圍五十仙迷
明治三十六年三月廿六日、妊娠五ヶ月、
術后二週ニシテ流産セシモ母体ハ死セズ
未タ報告セズ

卵 巢

一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
------------------	------------------	------------------	------------------	--------------------------------------	------------------

タ、長尾(三十八年十二月)三十一
二三年前、三十八年七月初診凡ソ鳩卵大
結婚十年前、妊娠セズ
左右卵巢フキプロサルコーム(切除後京
都大學鏡檢)左右卵巢速ニ増大、腹水アリ
左、重九六〇、〇瓦 縱徑十六、五仙 周二十八仙 形共ニ
右、重二千四百瓦 縱徑二十仙 周四十一仙 卵圓形
明治三十八年十二月九日手術、術后第三
日肺炎ノ症狀ニテ死亡
未タ報告セズ或ハ「ザルコーム」ノ移轉ナラ
ンカト考フルモ解屍セザレハ知ルニ由ナシ

二月五日

大坂市私立大坂河野病院

河 野 徹 志

(原著及實驗)

二六

子宮					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
患婦ノ年齡四十五歲、初發以來約十二年	二十一歲結婚、二十六歲一兒分娩、爾來妊娠セズ	子宮體ニ發生シタル間質性纖維筋腫	重量七キログラム、大サ妊娠八ヶ月大、不正圓形	明治卅一年二月五日膈上部切斷術、全治	
卵巢					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
患婦ノ年齡三十九歲、初發後約九年	十七歲結婚、不妊	右側卵巢ニ發生シタル纖維腫	重量三キログラム強、大サ大人頭大、不正橢圓形	明治三十三年十月八日、卵巢截除術、全治	

三十九年二月八日朝

東京日本橋區濱町三丁目七番地

楠田謙藏

子宮					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
四十五歲、五年前初メテ左腸骨窩部ニ鶏卵大ノ腫瘍アルヲ知レリト	十七歲二月、十八歲八月、五ヶ月流産アリシノミ他ニ産セズ	子宮腹膜下筋腫 子宮體ノ左側ヨリ發生	大サ殆ント全腹腔ヲ占領、多少凹凸アリ、長徑五cm、短徑二cm、重量六〇三キログ	明治二十七年十月二十七日	全治、明治三十三年マデ健全、其後ハ知ラズ
卵巢					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
三十歲、半年前ヨリ下腹ニ塊アリト	二十二歲三月結婚、出產三回、最終產ハ二十九歲一月、皆通常產	腫瘍ハ左右後側共ニ癒着アリ剝離又ハ結紮切斷シテ摘出セリ、卵巢ハ左右共ニ見出スヲ得ズ子宮トハ多少癒着アリシモ十分ニ分界アリシ因テ卵巢ヨリ發生セルナラント疑診セリ、肉腫、	形狀略球形ナルモ稍々突隆アリ周圍四二cm、重量ヲ計ラザリキ	明治三十三年一月廿八日	全治退院 其後ノ事ハ不明

右御答仕候卵巢ノ實質性腫瘍ニ就テハ他ニ實驗之ナキ故疑診乍ラ一例ヲ記シ申候拜具

二月八日

岡山弓之町

熊谷省三

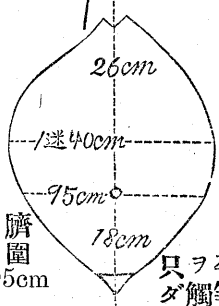
子宮					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
三十九年	二十一年	多發性纖維筋腫	五千五百瓦	明治三十八年四月七日	
卵巢					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
三十五年	二十六歲	卵巢肉腫(右側)	二千百瓦	明治三十五年六月二日	

三十九年二月九日

大坂市今橋三丁目

緒方正清

子宮					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
三十四歲未婚婦、發生十四年前ヨリ觸知セリト、職業百姓	結婚ナシ、分娩ナシ	漿膜下ノ發生ニシテ腸管及網膜ノ癒着ヲ有ス	三十七斤七合強、形ハ扁平圓形	三十七年十一月廿七日 手術後八時間ニシテ手術時ノ乏血ノ爲ニ死亡	Telangiectaticus Myoma
卵巢					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
卵巢、之ハ直徑壹尺二寸位ノモノアレトモ餘リ誇ルニ足ラズ故ニ茲ニ報知セズ	腹部外診上弛緩シテ平等、内部ニ硬固物ヲ觸知ス、動搖ナシ只ダフゝスルノミ				



臍圍 9.5cm
腹部最大周圍 1m, 40cm

開腹後ゴム驅血帶ヲ頸部ニ施シ動脈結紮後上臍部ヨリ切斷セシモ哀レハ時間後ニシテ遂ニ乏血ノ爲ニ死亡セリトハ遺憾ナリシ

二月八日

長崎醫學專門學校 櫻井三之助

拜啓過日御問合之件去八日拜答仕置候間御落手被下候事ト奉存候右之内卵巢？肉腫手術後ノ經過ニ付本人へ問合之處返信アリ爾後全ク異常無之近頃ハ多少胃病ニ惱ミ居候トノコトニ候間此段御通知申上候

岡山市弓之町

二月十一日

熊谷省三

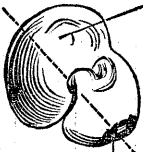
拜啓先般御示命ニヨリテ御通知致候 Uterusmyomaハ髓ニ Myometeleangiectodes ト記載シ上ケタル様ニ存候ヘドモ Uterusmyoma Lymphangiectodes ノ間違ニ付右御了承被成下度右不取敢御通知申上候

長崎病院

三月十二日

櫻井三之助

一 等	二 等	三 等	四 等	五 等	六 等
年齡 四十六年三月、十八才ノ時半年間六七回ノ子宮出血ヲ見ル七年前耻縫上贅卵大ノ Tumor ナ自覺ス	結婚 十六才四ヶ月ニシテ婚ス 分娩セシコトナシ	發生 子宮ニ發ス、 鏡發上 Myoma ut. Bin. Theil Carcinomatous degeneration, n. z. Platenep. Care.	重量 4100.0 周圍六〇センチ	手術年 明治廿八年五月九日術後一日ニシテ死ニ至ル	誌名 二五、センチ



一 等	二 等	三 等	四 等	五 等	六 等
年齡 十五才二ヶ月、下腹ニ腫瘍ヲ認メシヨリ十一ヶ月ヲ經テ來テ治ヲ乞フ	結婚 未婚、未分娩	發生 右卵巢ニ發シ宮体ニ癒着ス 鏡發上 Rundzellensarcom d. R. Ovarium	重量 970.0 形ハ不正腎臟形ナリ子宮ニ近キ所大小凹凸ヲ見ル長徑八〇短徑三〇厚サ八〇センチ	手術年 明治三十八年三月十四日術後二十日ニシテ健康ニ復シ退院	誌名

二月十二日

福岡醫科大學 高山尙平

12

子宮					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
手術當時三十七才 九年前ヨリ自覺セリ	二十才？ 不妊	子宮体部ニ發生セル筋腫	形狀圓形凹凸不平ナリ 重量七、八キログラム	明治三十七年六月二十八日 全年七月？日全治退院	何レノ誌上ニモ掲載ナシ

巢卵					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
手術當時三十三才 初メ七年前腫瘤アルヲ自覺	結婚二十才 分娩一回	卵巢ニ發生セル皮様囊腫 子宮ノ前方ニ位セリ	形狀ハ圓形囊狀ニシテ重量ハ明ナラザルモ内容液ハ ○○○アリ、腹部周圍一五〇センチメートルアリシ	明治三十八年十月二十三日手術ス、廿五 日午後六時死亡	何レノ誌上ニモ掲載ナシ

二月十三日

縣立神戸病院 婦人科

13

子宮					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
三十歳ノ婦人ニシテ三年前ヨリ腫瘍ノ存 在ヲ自覺ス	結婚十八歳、分娩二回	子宮体部纖維筋腫	腫瘍ノ重量三千二百八十瓦、大人頭大、 不正長橢圓形	明治三十七年十月十五日手術、全治	

巢卵					
一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日 等	六 等 誌 名
二十八歳ノ婦人ニシテ三十日前ヨリ腫瘍 ノ存在ヲ自覺ス	結婚二十二歳、不妊	右卵巢纖維筋腫	腫瘍ノ重量二百六十瓦、 大手拳大栗子狀形	明治三十四年六月二十四日手術、全治	

二月二十一日 佐賀市水ヶ江町 池田産婦人科病院 池田陽一

(原著及實驗)

一 等 年 齡	二 等 年 齡	三 等 年 齡	四 等 年 齡	五 等 年 齡	六 等 年 齡
四十五歳、一年以前ヨリ種々神經衰弱的ノ症狀アリ腫瘍ノ如キモノヲ自ラ感セシハ十一月前程ナリト云フ	未婚	子宮壁内並ニ漿液膜下筋腫	子宮壁ニ存セシモノハ塊狀ヲナシ一ハ大ク他ハ小ナリ爲ニ子宮腔ハ一個ノ漿液膜下ニ存スル鶏卵大ノ腫瘍アリキ	一月廿四日手術、經過佳良	二月廿七日 東京麹町區三番丁 肺病院醫局

15

子 宮 卵 (巢)

一 等 年 齡	二 等 結 婚	三 等 發 生	四 等 重 量	五 等 手 術 年 月 日	六 等 誌 名
------------------	------------------	------------------	------------------	---------------------------------	------------------

四十四才、
數ヶ月前ニ知ル

二十才ニテ嫁シSteril
子ナシ


子宮体實質ニ發シ
タル筋腫

アルコール標本トナリ
瓶ヨリ出テサル爲メ不明

明治三十八年
十月十日全治

Supravaginale Amputation.

大ナルモノハ實質ヨリ發
シ尙漿液膜下息肉狀ノモノ
九個粘膜下ノモノ一個
アリ



三月十四日

北海道區立札幌病院

子宮					
一 等 年 齡	參拾七年十一月、 拾年	二 等 結 婚	貳拾壹歳ノ時結婚、 妊娠分娩等ナシ	三 等 發 生 部 等	Adenomyom Ut. Fundusヨリ示指大ノ 短キStielヲ以テ
四 等 重 量	2貫250匁 ründlich	五 等 手 術 年 月 日 等	4/X/1904. Tod. glatt.	六 等 誌 名	
卵巢					
一 等 年 齡	四十六年、 九年間	二 等 結 婚	正式ノ結婚ニアラズ 分娩貳回、共ニ五、六ヶ月ニテ流産	三 等 發 生 部 等	Sarcoma ovarii sinist.
四 等 重 量	590匁 grob höckrig	五 等 手 術 年 月 日 等	24/V. 04. glatt, Heilung.	六 等 誌 名	

事務多忙ニ取紛レ遲延申譯無之候

小川教授殿

笠嶋助手

三月十四日

京都醫科大學婦人科教室

事務多忙ニ取紛レ遅延申譯無之候

小川教授殿

笠嶋助手

三月十四日

京都醫科大學婦人科教室

因云 東京醫科大學木下博士ニハ佝僂病調査トシテ富山縣出張ノ際當地ヲ過ギリ自己トシテハ未タ左ノミ大ナルモノヲ見スト雖濱田博士在職中頗ル巨大ナル纖維腫ヲ實驗セラレタルコトアリ多分全博士ヨリ回答セラレタルナラン云云、是レ小川教授ノ傳ヘラル、所ニシテ其濱田博士ノ實驗ニ係ルモノハ卵巢ヨリ發生シタル八貫目以上ノモノナリト云フ、尙山田謙治氏所報ノ體重ノ半以上ニ及ビタルモノニ就テハ岡田剛吉氏能ク之ヲ記憶セズト答ヘラレタリ

○新催眠藥「ウエロナール」Veronal.

及ビ「イゾプラー」Isopril. ニ就テ

福岡醫科大學藥物學教室

助手 溝口 龍三

西歷千八百二十八年ウエーレル氏ガ尿素ナル有機化合物ヲ無機物質ヨリ製出シ以テ之ヲ世ニ公ニセラレタル以來化學ノ進歩ト共ニ種々ナル有機化合物ヲ人工的ニ製出シ得ルニ至レリ之ヲ Synthetische Chemie. ノ賜ナリ而シテ此ノ化學ノ進歩ヤ引テ影響ヲ我ガ藥物學界ニ及ボシ年々歳々人工的ニ新藥ヲ製出セラル、蓋シ枚舉スルニ遑アラズ然リ而シテ吾人ハ新藥ニ對シテハ多大ノ注意ヲ拂フ價值アルヲ信ズ如何ントナレバ藥劑的療法ノ進歩上大ナル關係ヲ有スルガ故ナリ見ヨ彼ノ「抱水クロラール」ノ如キハ危險ナル心臟麻痺ノ作用ヲ逞クスルガ故ニ此ノ危險ヲ防ガントシテ「ウレターン」ナルモノ現ハレタリ然ルニ惜ムラクバ其奏効確實ヲ欲ク茲ニ於テカ「ズルフオナール」アリ然レドモ此ノ新藥モ已ニ知ル如ク腎臟ヲ刺戟シテ中毒性ノ腎臟炎ニ因スル血尿ヲ漏ラスヲ見ル豈ニ危險ナシト云フベケ